

待降節黙想会説教

2016年12月4日、待降節第二主日、小岩教会

[\[聖書朗読箇所\]](#)

説教

待降節第一主日に引き続き今日の福音にも洗礼者ヨハネが登場してまいります。

このヨハネという人は、どういう格好をしていたかと申しますと、「ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた」と、今日の福音が告げています(3・4)。そういう格好の人を見たことはありませんけれども、このスタイルは、代表的な旧約聖書の預言者、エリヤという人と同じスタイルであります。エリヤという人は、神のみ心に叶わないことを行う王を激しく非難し、そのために、命を狙われ、逃亡しなければならなかったのであります。齒に衣を着せない発言をしました。非常に激しい気性の人であったのでしょうか、天から火を降らせて、神に逆らう人を焼き滅ぼすということをしたと、列王記が伝えております。洗礼者ヨハネの発言、姿勢は、このエリヤの姿と重なっていると思われれます。「蝮(まむし)の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか」(3・7)と言って、ファリサイ派の人々、サドカイ派の人々に、激しく悔い改めを迫っています。

ところで、洗礼者ヨハネは、主イエス・キリストを指し示すために来られました。イエス・キリストの登場を準備するための、いわば、露払いの役をするために来た人であります。

ところが、ヨハネとナザレのイエスを比較しますと、印象的に、ずいぶん違うものがあると思います。二人は非常に対照的な印象を与えています。

次のような言葉が、聖書に出ています。

「ヨハネが来て、食べも飲みもしないでいると、『あれは悪霊に取りつかれている』と言い、人の子が来て、飲み食いすると、『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。徴税人や罪人の仲間だ』と言う。」(マタイ11・18-19)

これは、マタイの福音書に出て来る言葉ですが、ルカにも出ている言葉であります。(ルカ7・34 参照)

洗礼者ヨハネは、非常に厳しい、禁欲的な人であったことについて、聖書が述べて

いることは、一致しています。ヨハネに対して、ヨハネが指し示した、イエス・キリストは、少し意外な気がしないでもないですが、「大食漢で大酒飲み」、そう言われていたと、福音書に書いてあります。

わたしたちはいま、主イエスのお誕生を準備する待降節を過ごしています。ヨハネも、旧約の最後の人であり、新約の時代へと橋渡しをした人であります。わたしたちは、聖書を新約聖書だけでなく、旧約聖書を正典と受け取っていて、旧約聖書の勉強をするわけです。新約聖書は旧約聖書の歴史の上に成り立っています。そして、新約、つまり、新しい契約を述べる書であります。

どういうところが新しいかということ、わたしたちは、いつも確かめていきたいと思えます。新約の新しさは、洗礼者ヨハネから、イエス・キリストへと進展した福音の流れの中にあるのではないのでしょうか。洗礼者ヨハネは、自分の身に及ぶ危険を恐れずに、王にはっきりと、いけないことはいけないと言ったために、首を斬られて殉教した人であります。それに対して、イエスは、もちろん、はっきりと、いけないことはいけないと申しましたが、他方、苦しんでいる人、悩んでいる人、迷っている人に対して、非常に優しい方でありました。相手によって、言い方や態度が変わったのだと思えます。

みなさん、わたくしどもは、「いつくしみの特別聖年」を過ごしてきました。11月20日で終了いたしました。神のいつくしみは、いつまでも絶えることがない、あるいは、いつくしみは、一人の人、ナザレのイエスという人において、完全にあらわされ、そして、伝えられました。神は、いつくしみ深い方であるように、あなたがたも、いつくしみ深い方でありなさいと言われていています。

イエスと洗礼者ヨハネの違いは、「神のいつくしみ」というところにあるのかもしれないと思えます。

何年前、「無縁死（むえんし）」という言葉が、伝えられました。「無縁死」、一人で淋しく亡くなるということが、報道されました。

ところで、更に、最近、セルフというところがネグレクトでありました。子どもへの虐待です。なすべきことをしない、責任ある人、親や、そういう立場にある人が、自分が保護する立場にある人に対して、しなければならぬことをしない、そういうことが、ネグレクトですが、今度出てきた言葉は、「セルフ・ネグレクト」です。自分自身に対して、するべきことをしない、放置する、放任する、自分がどうなってもいいと、そういう生き方に陥ってしまう、ということ、指しています。最近、新聞で調べたのですが、ごみ屋敷というのがあるそうで、生きる意欲を失ってしまう、どうなってもいい、それが、近所の人にも迷惑を及ぼすことになる、それから、行

政の人も心配して、何とかしたいと働きかける、呼びかけるけれども、放っておいてくださいと、かまわないでください、という答えが返ってくる。そういう人が、最近増えているということでもあります。

クリスマスを前にして、わたしたちはこの社会の中で、顧みられない人と、弱い立場に置かれている人々、そして更に、自分自身のこともどうでも良いという思いに陥ってしまっている人のことを思い、その人たちが、元気に、希望を持って歩めるようにするにはどうしたら良いか、「いつくしみの特別聖年」で教皇様が言うておられる、「人に対していつくしみ深い者でありなさい。」という教えを、どのように実行したらよいか、しみじみ考え祈り求めるときを迎えています。

ごミサの後のお話の中で、そういうことについて、一緒に考えることができればいいのではないかと考えております。

聖書朗読箇所

第一朗読 イザヤ11・1-10

第二朗読 ローマ15・4-9

福音朗読 マタイ3・1-12

(福音本文)

そのころ、洗礼者ヨハネが現れて、ユダヤの荒れ野で宣べ伝え、「悔い改めよ。天の国は近づいた」と言った。これは預言者イザヤによってこう言われているのである。

「荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

ヨハネは、らくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べ物としていた。そこで、エルサレムとユダヤ全土から、また、ヨルダン川沿いの地方一帯から、人々がヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。

ヨハネは、ファリサイ派やサドカイ派の人々が大勢、洗礼を受けに来たのを見て、こう言った。「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れると、だれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ。『我々の父はアブラハムだ』などと思ってもみるな。言うておくが、神はこんな石からでも、アブラハムの子たちを造り出すことができになる。斧は既に木の根元に置かれている。良い実を結ばない木はみな、切り倒されて火に投げ込まれる。わたしは、悔い改めに導くために、あなたたちに水で洗礼を授けているが、わたしの後から来る方は、わたしよりも優れておられる。わたしは、その履物をお脱がせする値打ちもない。その方は、聖霊と火であなたた

ちに洗礼をお授けになる。そして、手に箕を持って、脱穀場を隅々まできれいにし、麦を集めて倉に入れ、殻を消えることのない火で焼き払われる。」

[説教へ戻る](#)